
V S 義妹な日々なのか？

菊太間郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VS義妹な日々なのか？

【Nコード】

N3190D

【作者名】

菊太間郎

【あらすじ】

ある日部屋に戻ると見知らぬ可愛い女の子が！親父に電話すると再婚したから義妹だと言った。何も聞いてないんですけど！しかも一緒に住めだって！なにより、ぜんぜんかわいらしくないんですけど！そんなこんなで義妹とその他に振り回される日々のコメディ

1日目 義妹参上

今日もいつも通り家に帰り、明日から始まる高2の新学年のことを考えてため息をついて

親から離れて一人暮らし中の俺がアパートの部屋にはいると

なんか、かわいい女の子がいました。

それも、裸で

とりあえず、ドアを閉めました。

表札に自分の名前が書かれているのを確認して

10回ほど深呼吸してドアを開けました。

女の子がいました。

テレビを見ながらプリンを食べてました。

「あのー誰ですか？」

女の子はこちらに気づいて

「まあ、とりあえず入れば？」

と言いました。

かしこまって中に入った僕に

「やあ、義兄さん。今日からよろしくね。」

笑って言いました。

とりあえず、コップに水を入れて飲みました。

そして、携帯を取り出しました。

「ん？義兄さん。なにしてるの？」

「警察に電話。不審者がいますって。」

女の子は、ボタンを押しだした僕の腕から携帯をもぎ取りました。

そして、逆にボタンを押して電話を始めました。

「あ、もしもし義父さん？ちゃんと義兄さんに説明したの？なんか、私のこと不審者として警察に通報しようとしてるんだけど・・・え、言ってない？もー電話代わるから説明してよ。」

電話が渡されました。

電話に出ると親父の声が聞こえてきました。

「やあ息子よ。元気にしてるかい？」

「なんか、変な子がいるんだけど。」

「ははは、おまえには言っでなかったが、実は父さん再婚したんだ。だから、その子は間違いなくお前の義理の妹だ。」

とうとう俺も耳がおかしくなったらしい。

なんだか再婚とか義理の妹とか聞こえてるぞ。

「それでだな、その子、お前の高校に進学予定だから一緒に住んでくれ。よかったじゃないか。義理の妹だぞ、同居だぞ。ギャルゲーみたいじゃないか！うらやましい限りだ。それじゃあ、そういうことだから……」

ブツツ……ツーツーツー

携帯を閉じてテーブルに置いた。

「で、どうだった？」

「まじで?」

「うん、まじ。よろしくね義兄さん。」

握手を求められる。

とりあえず握り返した。

「私、アヤナ。」

「俺はケイタ。」

なんだかよくわからないが俺には義妹ができたらしい。

「そういえば、なんで裸だったんだ？」

「いや、なんかインパクトのある出会いを演出して、わざわざ風呂にまで入ってみただけ。思ったよりおもしろくないリアクションだったかな。」

なんかダメ出しまでくらって落ち込んだ俺はあることに気づいた。

「その、プリン……」

「ああ、冷蔵庫に入ってたからもらったよ。」

「それ、俺が楽しみにしてたプリン。」

俺が一日の楽しみにしていたプリンはすでに食べ終わった後だった。

「ああ、私今日16才の誕生日だからお祝いつてことで。」

「俺も今日が17の誕生日なんだけど……」

まさか、誕生日が同じとは

いやいや、その前に誕生日の自分へのプレゼントとして残しておいた俺のプリンが！

「………さっ寝るか。義兄さんも明日から学校なんだから早めに寝ないと遅刻するよ。」

アヤナはベッドに入った。

なんだか、してやられた気分で風呂に入って

風呂から出た時に気づいた。

僕の寝る場所^{ベッド}が取られている！！

文句を言おうと思ったがすやすやと寝息を立てるアヤナを見ると起こす気にはなれずに

大人しく床に布団を敷いて潜り込んだ。

そのとき、後ろからフツと勝ち誇ったような笑いが聞こえたのは気のせい……だよな？

2日目 グッドモーニング義妹

「ほらほら義兄さん。起きて起きて。」

なんか誰かの声がする。

そんなはずはないよな俺一人暮らしだし。

もうちょっと寝よ。

「ちよつと義兄さん！遅刻しちゃうよ。私、入学初日から遅刻なんて嫌よ！」

義兄さんって誰だよ。

俺は一人っ子だよ。

俺、寝ぼけてるのかな。

「義兄さん。そろそろ起きてくれないと起こしかたの定番のあれ、やっちゃうよ？」

起こしかたの定番のあれと云えば、やっぱりあんなことやこんなことだろうか。

……甘エロい、なんて甘美で卑猥な朝なんだ！

ぜひ、ぜひともやってくれ！

ザバア

冷たい、冷たいぞ！

ガバツ

「な、なにするんだアヤナ！水をかけるなんて！」

バケツで水をかけられて布団も俺もびしょびしょになっていた。

起こしかたの定番ってこれか？

こんなのなのか？

「アヤナ！起こしかたの定番って言うのはだなぁ……」

「義兄さん。」

アヤナを見るとアヤナが妙にニコニコと笑っている。

あ、おでこに血管が浮き出ている。

あ、怒ってる。

アヤナは時計を指し示した。

8時。

学校までは走って20分。

HRは8時半から。

かなりぎりぎりである。

視線をアヤナに戻すと

アヤナは握り拳を作って、手をわなわなと震わせていた。

「私、7時に起きて、義兄さんの分も朝ご飯作って、7時半には義兄さんを起こし始めたんだけど・・・」

怖い、顔だけが笑っていて怖いです。

「ぐ、グッドモーニング。いい朝だねアヤナ。」

ひきつった笑顔で言うと

顔にパンチが飛んできました。

その後、鼻にティッシュを詰めて学校まで走って行きながら

俺の考える甘エロい朝の正しい起こしかたを教えると

またパンチが飛んできました。

3日目 昼休み

そう、それはいつも通りの昼休みだったはず、

やつがいなければ

「ねむ〜。」

昼休みになり、俺は疲れ果てて机に倒れていた。

いやしかし、早く行かなければ購買のパンが売り切れてしまう。

そう思い体を起こそうとした、そのとき

「義兄さん。」

やつか・・・やつなのか？

教室の入り口に目を向けると

やつがこっちを見て手を振っている。

なぜお前がここにいる義妹よ。

1年と2年の校舎は違っただろうが

そんなことも気にせずによつは俺の前まで来た。

「なんのようだアヤナ。」

「これだよこれ。」

と俺の机にどんと何かをおいた。

弁当箱だった。

「俺はいつも購買でパンを買っているんだけど。」

「だめだよ義兄さん。ちゃんとしたもの食べないと栄養が偏るんだから。」

ふむ。一理ある。

しかし！

お前がこんな気の利いたことをするはずもあるまい！

何をたくらんでいる義妹よ。

む？誰か来た。

「ケイタ、このかわいい子だね？」

こいつは俺の友達でタクヤ。

小学校からの腐れ縁だ。

そして横でうんうんと頷いているのがクラスの委員長のハルカ。

勘違いの激しい難しいやつだ。

とりあえず事情を説明した。

「なるほどね。お前の親父さんならありえるかもな。」

「で、でも。義妹って言っても年頃の男女が同棲って大丈夫なの？」

「ああ、今のところ大丈夫だよ。なあ、アヤナ。」

ポツ

「…………なぜうつむいて頬を赤らめるか！」

「ええ、なんとか…………。それでね、義兄さん。」

「なんだ？」

「いつもごめんね。私がベッドがいいなんて無理言うから、でも私、痛いのはちよつと…………。義兄さん、腰とか痛くない？」

うん？

なんか受け取りかたを間違えれば危険ですよ義妹さんや。

お前がベッドをとったから俺が床で布団をしいて寝ないといけなくなったから、腰は痛くないかって言いたかったんだよね？

こんなギリギリの会話なんてしたら、あいつが勘違いするかもしれないんだけど・・・

「ふ、ふ、不潔よ！ケイタ！義理とはいえ兄と妹が、そんな・・・」

やっぱり！こいつの勘違いは激しいんだよ！

たぶん、タクヤのほうは大丈夫だろうけど・・・

「腰ねぐ。痛いのは嫌か」。每晚每晚お楽しみのようだな。」

こつちもか！

おい！義妹！お前の危険な言い方のせいだ！責任取れ！

と思って義妹のほうを見ると

にやり

って笑ってますよ。

こいつ、これが目的か・・・

その後、誤解を解くのに昼休みを時間いっぱい使った。

ちなみに弁当は義妹が食べ終えたあとだった。

あいつ、始めからこのつもりだったのか。

やられた〜

3日目 昼休み（後書き）

みなさんのおかげで、あっという間に総表示回数が500を超えました。

もうすぐで1000に乗りそうです。

もしよければ評価、感想のほうもよろしくお願いします。

4日目 激辛スパゲッティと激甘シチュー

「義兄さん、おなかすいた。」

テレビを見ながら寝転がっているアヤナがわめいている。

「自分で作れ。」

俺は今自分の宿題で忙しいのだ。

「やだ〜めんどくさい。」

「なら、我慢しろ。」

「ああ、お義父さん、お母さん。お義兄ちゃんはかわいい義妹にご飯も作ってくれません。でも心配しないでください、アヤナはめげません。」

なんか後ろで悲劇のヒロインを気取っているが無視。

「む〜。義兄さんのケチ〜。」

「なんとも言いなさい。」

「義兄さんのバカ、変態、スケベ、あんぼたん・・・」

はっはっは痛くもかゆくもないね

「・・・@@@、 x、 x!」

おいおい、伏字になるようなことまで出てきたぞ。

「中学生のときの文化祭で女の子に手紙をもらっただけど実はそれはスト~~~~ップ！」

なぜお前がそのことを知っている。

それは俺の過去の過ちの一つとして記憶の奥底に封印したのに

「なぜお前が知っている！」

「義兄さんのクラスのタクヤって人に聞いた。」

なるほど、やつが全ての元凶か

「じゃあさ、言いふらさないからご飯作って。」

「却下」

「も〜じゃあ、力づくでも作ってもらうからね。」

アヤナは俺の首に手を回してきた。

なんだ、色仕掛けか？

生憎だが、俺にはそんなものを通用しない・・・って！

絞まってる絞まってる！

力づくって確かにそうですね、もつと女の子らしい方法を取りなさい！

「どう？作ってくれる気になった？」

いや、ここは義兄として威厳のある態度で否と言わねば

やっぱり無理です苦しいです。

首を縦に振った。

俺の体が解放される。

「じゃあ、さつさと作って。」

アヤナはテレビの前に座った。

くそ〜と言いつつも大人しくご飯を作った。

と、そんなわけあるまい。

スパゲッティを作りつつもトマトソースにたっぷりとタバスコを混ぜてやったわ。

「ほら、スパゲッティ。」

「わ〜いありがとう義兄さん。」

いい笑顔を向けてくるアヤナに少し罪悪感を感じた

そして、アヤナが激辛スパゲッティを食べた。

「……………うゝんおいしい！このピリ辛が最高だね。」

あれ？なんか高評価？

タバスコ半分くらい入れたんだけど

「お前辛いの好きなんだ……」

「うん。義兄さんも知ってたんでしょ？わざわざ辛いのにしてくれてありがとう。」

うゝん想定外だ。

でも、まあ喜んでくれたんなら悪くないかもな

「はい、義兄さんも。あゝん」

「あゝん。」

パクッ

差し出されたスパゲッティを

条件反射で食べてしまった。

もちろん、激辛で

ちなみに俺は甘党だ。

「・・・・・・・・から~~~~い!!!!!!」

急いで水を飲んだが手遅れだった。

唇も舌もひりひりとするレベルを超えて、痛い。

「あ、そうだ。義兄さんのご飯は私が作るね。わざわざ私のために辛いを作ってくれたんだもん。」

にっこりと笑うアヤナ。

気づいているのか俺の思惑に

「義兄さんは辛いのと甘いのだっちが好き？」

「あ、甘い。」

「そっか〜わかった。しばらく待っててね。」

台所にひっこんだ義妹に恐れを感じた。

あいつ、どんなの作るつもりなんだろう。

数時間して、アヤナが持ってきたのはシチューだった。

見た感じは普通だが

「さ、早く食べて。」

一口目を食べた。

・・・甘い。

なんというか甘い。

砂糖の味しかない。

「これ、砂糖どのくらい使った？」

「うーんと一袋。」

1キロの砂糖を全てシチューに使ったというのか義妹よ。

「さ、早く食べて食べて。シチューはまだまだあるんだから。」

台所を見ると、湯気の出ている鍋があった。

もしかして、あれは全てシチューなのか？

「早く早く。」

た、助けてくれ。

「義妹よ。お義兄ちゃんが悪かった。もう、あんなことしないから。」

「悪かったって何のこと？私はどうしてもおいしかったよ？」

笑顔の義妹、怖いぞ。

「さ、義兄さん。あゝん。」

アヤナがスプーンにシチューをすくって差し出してくる。

た、助けてくれゝ

その後、俺は鍋いっぱいシチューを食べるまで寝かせてもらえなかった。

そして全てのシチューを食べ終わった俺に義妹が笑顔で言った言葉

「明日もご飯作ってね。お・に・い・ちゃ・ん。」

はたして、俺が義妹に勝てる日は来るのだろうか。

5日目 バイト

「じゃあ、俺行つて来るから。」

「どこに?」

「バイト。」

「なんのバイト?どこでやってるの?」

「きんぎょ!!ダメだ!教えない。」

危つく教えそうになってしまった。

実は近所の本屋でバイトをしているのだが

そんなことをこいつに教えたらからかいに来そうで怖い。

「なんで?」

「来そうだから。」

「当たり前じゃん。行つてたつぷりと難癖つけるよ。」

「だからだよ。」

ちえーっと言いながらテレビの前でプリンを食べる義妹

うん、そのプリン俺のだけだね。

「でさ、義兄さん。」

「なんだ？」

「バイト代もらったら何買ってくれるの？」

「なにを言っておるか。何も買ってなんぞやらんぞ。」

「えゝケチゝ。甘いものがほしいゝ」

「ちなみに今食べているプリンは俺のだけど。」

「早く行かないと遅刻するよ。」

うまくかわされたが、確かに遅刻しそうだった。

そして、バイトが終わる時間になると

本屋に誰かが入ってきた。

「いらっしやいま・・・せ。ってお前がなぜここにいる！」

そこにいたのはやつだった。

「うん？この人に連れてきてもらった。」

義妹の後ろから現れたのタクヤだった。

「なにをしている。」

「うん？いや、お前んちに遊びに行ったらバイトだつてこと忘れててさ。家に帰ろうとしたらアヤナちゃんに案内してくれって言われたから。」

余計なことをしおって

当の本人の義妹はというと、本屋の中で本を見ている。

おや？店長が出てきた。

うん？義妹と話してるぞ。

おやおや？なんだか意気投合してるぞ？

「はっはっは、いやあ君は実に話の分かる子だね。」

「このくらい常識ですよ。それはそうと、義兄がいつもお世話になってます。」

「義兄？ああ、君がケイタくんの義妹のアヤナちゃんか。」

「はい。」

「まあ、いつでも来るといい。君とは話が合いそうだな。」

「はい。じゃあ、義兄さんのバイトの日はできるだけ来させてもらいます。義兄さんのバイトの日を教えてもらえませんか？」

なんか、バイトの日をメモしてるんだけど

「うん、じゃあ。僕は仕事があるからこれで。ケイタくんもいい義妹をもったものだ。」

「いえいえ、私こそ、からかゲホツゲホツ、優しい義兄で幸せです。」

今あいつ絶対からかいがあるって言おうとしたよ。

なんか、こっち見てにやりしてるし

そのときぽんぽんとタクヤが俺の肩をたたいていった。

「まあ、なんだ。いい義妹さんを持ったな。同情するよ。」

ああ、そうだな。

よく考えると

「お前が余計なことをしたからだ！」

タクヤの頭を一発殴った俺は

これからのバイトの時間のことを考えながら

おもむろに本を一冊手に取り

レジに向かった

「630円です。」

店長にアルバイト情報誌の代金を渡すと

ぎゃーぎゃーと騒ぐ義妹と

哀れみの目を向けるタクヤに挟まれて

とぼとぼと帰った。

5 日目 バイト（後書き）

いつの間にか早くも総表示数が1500を越えていました。
読者の方々のおかげです。

ありがとうございます。

これからもがんばって書いていくので、よろしくお願いします。

6日目 義妹の友達

「ねえ、義兄さん。」

「なんだ？」

「今日友達が家に来るから。」

「なるほど、俺はお邪魔と言うことが、まあいいさ。お義兄ちゃんどっかに行ってるさ。」

「あ、そういうことじゃないの。邪魔なのは本当だけど・・・義兄さんのことを紹介しようと思って。」

邪魔は本当なのか。

俺、なんか落ち込んできたかも。

ああ、我が理想の義妹シチュエーションはいづこへ・・・

「だから、家に居てね。」

「ああ、わかった。」

家のチャイムが鳴った。

玄関から戻った義妹の後ろには二人女の子がいた。

「あ、あの私、リカって言います。あ、あの、よ、よろしくお願い

します。」

深々と頭を下げてる。

うーん、なかなかいい子だ。

「ふーん、これがアヤナの自慢の義兄さんか。あ、私はアリサ。よろしく。」

さっぱりした子だなあ。

ん？自慢の義兄さん？

俺？

「ちょっと、アリサ！なにを変なこと言ってるのよ！」

アヤナが必死になっているかわいいな。

あんなアヤナ初めて見たよ。

「えーだつて。いつもいつも義兄さんの話してるじゃない。ねえ、リカ？」

こくこくと頷くリカちゃん。

「だから、それは愚痴言ってるだけじゃない！うざいとかキモイとか。」

ショックだ。

なんか、喜んでた分さらにショックだ。

お義兄ちゃんは、もう立ち直れないかもしれないよ

「あ、あの・・・落ち込まないでください。お兄さん。」

ああ、リカちゃん。

君は優しいんだね。

まるで君はネロとパトラッシュを迎えに来た天使のようだよ

さあ、俺を連れて行っておくれ・・・

「あゝほらゝアヤナがひどいこと言うから落ち込んでるよ?」

「もゝまったく・・・ってリカ!お兄ちゃんって!」

「え?あつ!」

はっとしたリカちゃんは顔を真っ赤にした。

ゆでだこみたい。

そつだ、今度たこ焼き買ってこよう。

「わ、私、一人っ子だからお兄ちゃんに憧れてて・・・つい・・・」
「

真っ赤な顔でうつむいて言うリカちゃん。

うーん、これも一つの萌えか・・・

「あーじゃあ私はケイ兄って呼ぶー。いいでしょ、ケイ兄？」

二人の女の子が上目遣いに俺を見ている。

ああ、俺はなんて幸せ者なんだ。

おとなしいひかえめな妹 リカ

元気な明るい妹 アリサ

うーん、いい。

「ああ、いいとも。二人とも俺のことを兄とってくれたまえ。我が妹達よ。」

「義兄さん。ちょっと後で話があるから。」

アヤナが怒ってる。

怖い。

「アヤナ。私たちにケイ兄をとられて悔しいんだよねー。ケイ兄にかまってもらえないから。」

「そ、そんなことあるわけじゃない。なんで私が義兄さんに・・・」

アヤナがうるたえている。

ここは義兄として

1 一緒になってからかう 後で殺される

2 ほつとく 後で八つ当たりされる

3 義兄として一言いいことを言う 好感度アップ

．．．．．3だな。

「アヤナ．．．。」

「な、なに？」

「お前は、俺の大事なツンデレ義妹だ。」

うん。いいこと言ったな。

あれ？

アヤナもつと怒ってない？

なんか、俺に向かってきてるんだけど

「だ、だれが．．」

うん？手を振り上げてどうした？

「誰がツンデレよ！この変態義兄！！」

俺が意識を失う前に見たのは

目の前まで迫る拳だった。

俺が明日のジョーならここでクロスカウンターでもおみまいできる
のだが

あいにく俺にそんな技量はない。

まあ、いいさ……

俺はもう疲れたよ……パトラッシュ

6日目 義妹の友達（後書き）

みなさんのおかげで総表示数が3000を越えました。
これからもがんばるのでよろしくおねがいます。

7日目 憧れの彼女は猫被り

今日も平和な昼休み

いつも俺はタクヤと購買で買ってきたパンを食べていた。

そう、タクヤと食べていた。

断じて、目の前に学年一と言われている美女はいなかった。

なのに、なぜ彼女はいるのだろう。

しかも、にこにこしながら、さも当然という表情で

「あのく沢式さん？」

「エリカでいいわ。」

「エリカさんはなぜここにいるんでしょうか？」

俺の隣のタクヤもうんうんと頷いている。

「あら？私がいると迷惑かしら？」

「いえ、そんなわけではないんだけど……。今まで俺達と接点とかなかったよね？」

そう、今までこの人と関わったことなんてないのだ。

ただの一度も。

クラスも違うし。

エリカさんは俺達にとって憧れの高嶺の花であり、おいそれと話すことなんかできなかった。

俺も一年のころから憧れていた。

なのに、なぜここにいるのだ

「ええ、確かになかったわよ、特には。だから、これから仲良くなつていきたいのだけど・・・迷惑かしら？」

「そういうわけではないですけど・・・」

なんていうか、よくわからない人だ。

答えが答えになってない。

まあ、いいか。と俺が呟くと

「お前って本当に他人に関心が薄いよな。」

とタクヤがあきれたように言った。

どうやら、俺は他人に関心が無いように思われているらしい。

まあ、エリカさんのことも特に気にもせずパンを食べていると

「義兄さん。」

と後ろからやつ声が

振り向くとやはりやつがいた。

「なにを企んでいる義妹よ。」

「うわっ。義兄さんは私のことをそんな風に見てたんだ。」

当然だろう。

お前が来ればすなわち俺はピンチに陥る。

それは自然の摂理なのだ。

「あれ？義兄さん。エリカ先輩と知り合いなの？」

「ああ、今日からな・・・って、なんで知ってるの？」

「だってエリカ先輩、一年にも有名だもん。」

ああ、そういえばエリカさんは学年を問わず人気がある。

一年に名前が知れ渡っていても不思議ではないか。

「あの、ケイタくん？アヤナさんはあなたの・・・」

「ああ、俺の義妹だよ・・・って・・・え？」

エリカさんがなぜ知っている。

「なんで、アヤナのこと知ってるの？」

「だってアヤナさんってけっこう有名よ。一年生にかわいいこがいるって。」

そうだったのか、こいつが・・・

世も末だな。

「どう？義兄さんも鼻が高いでしょう。」

胸を張るな義妹よ。

いくら胸を張ろうともお前の胸ではあまり効果がない。

「あら？ケイタくんもちよっと人気があるのよ？落ち着いていて、なんだか大人ツぽいって。」

「そんな話聞いたこともないよ。」

「それは、お前が他人に興味がなさすぎるからだ。それにお前何度かラブレターもらっただろうが、しかも俺がお前に渡すように頼まれてお前に渡してるけど一度も行かないし。」

「だって、あれは行ったらお前が居てドッキリでした〜とかそんなやつだろ？」

どうしたみんな？

なんかため息ついたりして

「まあ、義兄さんらしいと言えば義兄さんらしいか・・・」

「そういえばアヤナ。お前何しに来たんだ？」

ああ、そうだったとアヤナ

「今日の帰り、食材買いに行くからついてきて。今日は私がご飯作ろうと思ったんだけど、うち今材料なかったでしょ？」

「ああ、べつにいいが・・・。どうした？お前が自分からご飯をつくるなんて・・・」

「まあ、二人暮らしたし。気が向いたというか、鬼の霍乱というか・・・」

お前鬼の霍乱って自分で言うか。

ガタンッ

あれ？エリカさん急に立ち上がってどうしたんだ？

「あなたたち、二人暮らししてるの?!」

「ええ、まあ・・・」

「そんなのダメよ！年頃の男女が二人でなんて!」

なんだ、そういうことか。

みんな結構過剰に反応するんだよなあ

「別に問題ないですよ。義理とは言え妹ですし、こいつこんなだから女としてはみれませんし・・・。」

「でも・・・なにか過ちがあるという可能性も・・・。」

「ないですよ・・・まあ過ちがあつたらあつたでおおしろいかもしれませんし。」

義妹よ、さらつと怖いことを言うな

「ダメよ！過ちなんで！」

「あれゝエリカ先輩は私たちに過ちがあつたら何か困ることもあるんですか？」

義妹よ、挑発するでない。

「あ、あなたたち兄妹でしょ！」

「知らないんですか？義理の兄妹って結婚できるんですよ？」

義妹よ、それはリアルに恐ろしいぞ

「ぐつ、でもダメなものはダメよ！」

「なんでダメなんですか？」

「そ、それは・・・あ、あなた後輩でしょ大人しく先輩の言うこと聞きなさい!」

「あゝそうやってごまかそうとする。」

ああ、女同士のけんかって怖い

「とめなくていいのか?」

「タクヤ、あれがお前にとめられるのか?」

すでにけんかはピークに達している。

「この × ! 黙って言うこと聞け!」

エリカさん、すでに口調も変わってます。

「なによ、この !」

義妹、女の子がそんなこと言うんじゃないやありません。

「なんていうか、エリカさんって、口調も変わっちゃったし。たぶん、あっちが地なんだろうな・・・」

遠くを見ながら言うなタクヤよ。

俺達の憧れのエリカさんはまやかしたのださ。

「ああ・・・」

現実は何でこんなにもつらく、厳しいのだろう。

ああ、チャイムが鳴ったな。

しかし、チャイムにもあの二人を止めることは無理なのか

きっと、これは夢なんだろう。

さあ、今日は帰ったら早めに寝よう。

7日目 憧れの彼女は猫被り（後書き）

総表示4000も越えました。

でも、早くも話のネタが浮かばなくなってきました。

365日まで続ける予定が早く終わるかもしれません。

8日目 合コン

「ときに義妹よ。」

「なに？」

「合コンなるものを知っておるか？」

「知ってるよ。」

「実は、タクヤに誘われて行くことになったんだけど、よくわかんなくてさ。」

タクヤのやつ、人の都合も聞かないで勝手に決めやがって

「別に、ふつうにしていればいいんだよ。」

「なるほど、それで今日は俺いないからごはん外で食べてくれ。」

「わたしも中学の時の友達に呼ばれてるからいらないよ。」

うん。

なんか嫌な予感がひしひしとするよ。

そんなこんなで合コンでカラオケに来たけど、まだ女子のほうは来てないようだ。

来ていたのは、俺とタクヤと仮名Tだけだった。

「おい、タクヤ。今日誰が来るんだ？」

「俺の知り合いの他校の一つ下のやつが中学の時の友達呼んでくる
つてさ。」

お、ドアが開いた。

来たみたいだな。

お、一人目の子は胸がでかいな

あれはDくらいだな。

二人目の子は、すらっとしてて綺麗だなあ。

三人目の子は、うん。

俺の義妹だ。

タクヤと目を合わせると、タクヤは苦笑いをしてた。

そんなこんなで自己紹介をした。

胸の大きい子がユキ

すらっとした子がX

としておこつ。

「ねえねえ、ケイタさんってモテるでしょ？」

「いや、そんなことはないよ。」

どうやら俺はユキちゃんに気に入られたらしい。

ユキちゃんは他の男を相手にせずに俺ばかりに話しかけてくる。

「えゝ、じゃあゝ私がねらっちゃおうかなゝ。」

ユキよ。俺の腕にしがみついてその大きな胸を当ててくるでない。

ジッ

そして義妹よ。

そんなにお義兄ちゃんをみつめてくるでない。

「どうしたのアヤナ。アヤナもケイタさんをねらってるの？」

「い、いや。私は別に……」

義妹よ。

大人しくタクヤの相手をしてやってくれ。

「そっかゝまあ、あんたにはもうお相手がいるみたいだねゝ。」

な、なに?!

それは初耳だ！！！！

「そ、そんなのいないわよ！」

「あつれ〜いつもメールでうれしそうに言ってる例のお義兄ちゃんは？」

なに！

俺は嫌われてなかったのか！

ついにツンデレのツンがデレに変わったのか！

「そ、そんなこと言ってないわよ！」

「じゃあ、このメールはなにかなあ？ねえ、ケイタさん。ちょっとこれ見てみてよ。」

ユキちゃんが携帯を見せてくる

『ユキ元気？私は最近けっこういい感じだよ。兄妹になったケイタ義兄さんもいい人だし。』

義兄さんってば私がお願いすると文句言いつつも最後にはきいてくれるんだ。ホント優しいんだよ。『

だよ。今度ユキにも会わせてあげたいな〜。』

お、お義兄ちゃん感激です。

アヤナ、本当は俺のことを・・・

「ちよっ！ユキ！何見せてるのよ！ほら、義兄さんにもにやにやしない！」

あ、言っちゃった。

「え？義兄さん？・・・ケイタ義兄さん・・・ケイタさん・・・あぁっ！！！！！」

気づかれちゃったよ

「ケイタさんがアヤナの義兄さんだったんだ。びっくり。」

「ま、まあね。」

「だから。アヤナ、私がケイタさんにかまってばっかいるからケイタさんのことにらんでたんだ。嫉妬したんだ、かわいい。」

「だ、だれが嫉妬なんて・・・」

「まあまあ落ち着いて。お・義・姉・ちゃ・ん」

「お義姉ちゃんって言うな～～！！！」

ああ、なんだか合コンって空気じゃなくなってきたよ。

あれ？ユキちゃんの携帯が落ちてる

あれ？2日前のアヤナからのメールだ

『まじうざい。あの変態工口義兄死ね』

たった一行のメール

お、お義兄ちゃんがそんなに嫌いか

アヤナ、お義兄ちゃんはわからないよ

ちなみに話に参加してなかったTとXは二人でずっと楽しんでいてくっついたという話を聞いた。

8目 合コン（後書き）

4500越えました！

9 日目 バイトでVS

「それじゃあ、バイト行つて来る。」

「あ、私も行く。」

「ダメ。」

「私は店長に用事があるんであつて義兄さんに用事があるんじゃないし〜。」

こいつ、店長を理由にしゃがった

くそ〜店長もこいつと仲良く話したりするなよ〜

本マニア同士通じるものがあるのだろうか

こいつと店長はいつも話している。

「ちわ〜す。」

「こんにちわ〜」

「ああ、いらっしやい二人とも。」

相変わらず店の中には客の姿がほとんどない。

俺のバイト時間に来る客も多くて10人くらいだしな。

とりあえずレジにつくが暇で暇ですることがない。

アヤナは店長と話し込んでるしな。

お、客だ。

「いらっしゃいませ〜・・・エリカさん？」

「あら？ケイタくん。ここでバイトしてたの？」

「はい、エリカさんは何か本でも探してるんですか？」

「ええ、なにか小説を読んでみようと思って。そうだ、ケイタくんいい本知らないかしら？」

「俺は本はあまり詳しくは・・・そうだ、アヤナ！」

アヤナなら何か知っているだろう

「義兄さんなに？うわっ！なぜこやつが」

「ああ、実はエリカさんが何かおもしろい本は無いかと言っているんだが、お前なにかおすすめの本とか無いか？お前本好きだろ。」

「しりません。」

うわっ。

こいつそんなにエリカさんのことが嫌いなのか。

エリカさんも険しい目をしてるし

「そう。じゃあ仕方ないわね。それじゃあケイタくん、一緒に本を探してもらえるかしら？」

「ああ、はい。わかりました。」

まあ、仕方ないだろう。

二人はこんな調子だし。

「ちょっと待ってください！」

アヤナよ、これ以上何かあるのか。

「なにかしら？」

「義兄さんはレジにいないとダメでしょう。」

確かにレジに誰もいないのはまずいな

「店長、レジ任してもいいですか？」

「ダメです。店長は私と話しあっている最中ですから。」

おいおい義妹よ、何をそう怒っているのだ。

「あら、店長さんの仕事の邪魔はいけないわよ。アヤナちゃん。」

「ちっこの猫被りが・・・」

おいおいまずいんじゃないかい？

これは・・・ちょっと・・・

「だ、誰が猫被りですってー！！このブラコンー！！」

「誰がブラコンよー！！」

ああ、もう誰でもいいから助けてくれ

「ケイタくん。」

「あ、店長。」

店長は俺にそつと本を渡した

『女性の品格』

「あとで、アヤナちゃんに渡しておいてくれ。ちゃんと読むようにと・・・」

店長、お気遣い感謝します。

しかし、あの二人は品格の前に身につけるべきものがあると思うんです。

それにしても・・・

ああ、今日はいいい天気だなあ。

10日目 久しぶりだね妹たち

今日は休日。

疲れをとるために昼まで寝よう。

うん、そうしよう

「ねえ、義兄さん。起きて！もう朝だよ！」

義妹よ、義兄は眠いのだ、疲れているのだ。

主に、お前のせいで

「だめだよアヤナ。そんなんじゃあ起きないって。お手本見せてあげる。」

ん？誰の声だ？

どこかで聞いたような・・・

「ねえ、ケイ兄。お・き・て」

耳元に息が吹きかけられた

「うわああああ！！！！」

ガバツと飛び起きてしまった。

しまった。

ていうか、誰がやったんだ？

「やつ、ケイ兄。」

「なんだ、アリサちゃんか・・・それに、リカちゃんも。久しぶりだね。」

「はい。お久しぶりです。」

なんだ、二人とも遊びに来てたのか。

「で、なぜ俺を起こした。」

「ごはん、つくって。」

義妹よ。

お前はごはんのために義兄を起こしたのか。

お前にとって義兄はなんなのだ。

まあ、つくるけど・・・

「アヤナ、あんたケイ兄に頼りすぎなんじゃない？ごはんくらい自分で作りなよ。」

「だって、義兄さんのほうが上手だし。頼めばやってくれるし・・・」

「でも・・・お兄ちゃんがかわいそう・・・」

「大丈夫。義兄さんは尻に敷かれるタイプの人だからこんなこと苦にならないんだよ。」

「ケイ兄くんこんなこと言ってますよ。」

「まあ、可愛い義妹のためだからね。」

まあ、正直な話頼ってくれることはうれしいし。

別に料理が嫌いなわけでもないしな。

「ほらね。」

でも、義妹よ。

あまり頼りすぎるでない。

ほら、無い胸を張るな。

「は〜。ケイ兄も甘甘だね〜美しき兄妹愛か。」

「そ、そうですね。パフェに砂糖足したみたいに甘いです・・・まるで吐き気がするくらいに・・・」

え？

今なんかすごいこと言わなかった？

吐き気がするくらい？

リカちゃん・・・？

「こゝらリカ。あんたまたブラックなこと言つて。ケイ兄ごめんね
この子たまにブラック入るから。」

そうだったのか、ブラックか・・・

「ごめんなさい・・・なんだかアヤナちゃんがうらやましかったか
ら・・・」

そういえば、リカちゃんは兄にあこがれてたんだつたな。

「リカちゃんも好きなだけ甘えていいんだよ。」

「え・・・ほんとうですか？あ、ありがとうございます。」

「あゝケイ兄。リカだけずるゝい。」

「はいはいアリサちゃんも好きなだけ甘えてください。」

「やったゝ。」

うん？義妹よ、なぜそつも睨むのだ。

「義兄さん。もてもてでうらやましいですね。」

義妹よ、なにを勘違いしている。

怖いぞ・・・

「ケイ兄」

「お兄ちゃん・・・」

妹たちよ、あまりひつつくでない。

君たちも年頃の女の子だろうに

お、リカちゃん意外と胸大きいな。

しまった、思わず顔がにやけてしまった。

義妹よ、だからこちらを睨むな

「義兄さんの、変態、スケベ、死んでください。」

義妹よ、義兄がなにをしたというのだ。

義妹よ、急に立ち上がってどうした

義妹よ、フライパンなど持ってきてどうした

義妹よ、それでなにをするつもりだ

義妹よ、ふりかぶってどうし・・・バァァン！！！！

「ん？ああ、もう夕方か。」

うん？なんだか頭がじんじんするぞ

俺は今日何をしてたんだろう。

なにも覚えてないぞ。

「義妹よ、なぜにして頭がこんなに痛むのだろうか。」

「知りません。」

義妹よ、なぜにしてそんなに機嫌が悪いのだ。

そしてなぜ頭がこんなに痛いのだ。

10目 久しぶりだね妹たち（後書き）

ついに10000こえました!!!

11日目 義妹よ、これで拭けと言っのかい？

「義兄さん、ご飯。」

「ちょっと待つて。今このドラマがいいところだから。」

いや〜いつもながら迷探偵コナム君はハラハラさせてくれるぜ

この犯人を間違いないながらも無理矢理証拠をでっちあげて事件を解決するところがおもしろいんだよね〜

『犯人はあなたですね、斉藤さん。』

『そんな！私にはアリバイがあるんですよ！』

『そんなアリバイ、簡単に崩れるんですよ。つまりあなたは（プチッ）

電源が切られた！

なにをする義妹！

「何をするんだ！コナム君の迷推理が！」

「そんなことより、はやく〜ご飯〜！」

「いいから早くしないとコナム君！」

急いで電源をつけた。

『と、これでああなたのアリバイは崩れた。』

『し、しかし私がやったなんて証拠は・・・』

しまった・・・

アリバイ崩しが見られなかった。

『証拠なら右足を見ればわかる。』

『えっ！』

周りのみんなの視線が斉藤さんの右足に集まる。

『おっと失礼。私から見て右でした。つまりあなたの左足です。』

その左足には少量の血が付いていた。

『その血は、なんですか？おそらく鈴木さんの血でしょう。あなたは鈴木さんの遺体に近寄っていない。その血を鑑定して鈴木さんの血だったとしたら・・・ね。』

『そ、そんな・・・なぜ血が・・・』

これは・・・コナム君の77の迷探偵技の1つ『仕立て上げスナイパー』だ

みんなの視線を右足に集めてその隙に隠し持った道具で左足に被害者の血をつけて、無理矢理

犯人に仕立て上げるという恐ろしい技だ。

あ、斉藤さん連れて行かれた。

この理不尽さとしじつけがましいところがいいんだよね

お、コナム君の迷ゼリフを聞き忘れてはいけない

おきまりのポーズを取って

『何が真実なのかは俺が決める!』

うーん、この唯我独尊なところも最高だな。

さて、そろそろご飯つくってやるか

あれ？

「お前、自分で作ったのか。」

「うん、義兄さん遅かったからね。」

あ、怒ってる。

額に血管浮いてるよ？

「あ、義兄さんの分のシチューもあるから食べてね。」

うーん、怒りながらも俺の分まで作ってくれるとは・・・

お義兄ちゃん感激だな

パクッ

「うん、おいしいよ。」

パクパク

パクパク

「ん？」

ギョルギョルギョル

腹の調子がおかしい

なんかまずい感じがする。

「アヤナ・・・お前まさか・・・」

そこで俺は台所にあるものに気づいてしまった。

下剤がおいてあった。

俺はトイレに走った。

そして駆け込んだ

（お聞かせづらい音）

「はっすつきり。」

そして、俺はトイレットペーパーがないのに気づいた。

「な、なに・・・あいつ・・・」

そして、代わりにあるものがおいてあった。

「紙ヤスリ・・・」

しかも荒いやつ

居間からは義妹の高笑いが聞こえてきた。

拝啓 お義母様

お元気ですか？

心配しないでください。

義妹はたくましく育っております。

それはもう、すくすくと・・・

11日目 義妹よ、これで拭けと言ったのかい？（後書き）

15000をこしました！

なにかそろそろ記念みたいなもの書こうと思うのですが、案が浮かびません。

12日目 コーヒー煎れて

「店長。」

「なんだい？ ケイタ君。」

「あいつ呼ぶのもうやめませんか？」

レジの後ろには店員用のいすに座りコーヒーを飲む義妹

あいつ、居着いてやがる

「どうしてだい？ 僕はなかなか楽しませてもらってるよ。アヤナちゃんとは話があうからね。」

「俺がいじめられるんですけど・・・。」

後ろではアヤナがコーヒーおかわり〜とか言っている。

あいつ、大物か

「まあまあ、あれだって歪んだ愛情表現かもしれないよ?。」

「できれば真っ直ぐな愛情表現にしてほしいです。」

「でも、そんなアヤナちゃん想像できるかい?。」

真っ直ぐな愛情表現のアヤナ

『義兄さ〜ん。コーヒー飲みた〜い。』

『おいおい、自分で煎れるだろ?』

『だって義兄さんの煎れてくれたのがいいんだも〜ん。』

『仕方ないな〜。ちょっと待ってろ。』

『わ〜い、ありがと〜。義兄さん大好き〜。』

なんか、怖いな。

鳥肌が・・・

「想像したら怖くなりました。」

「はっはっは、そうだろう?あれがアヤナちゃんの一番いい状態なんだよ。」

「でも、このままだと胃薬が友達になりそうで・・・」

「そこはまあ、義兄としての深い愛情で受け入れてあげられるようにならないと。」

「あいつ、俺がうどん食べてたら、七味渡すときにわざとふたをゆるめて渡すんですよ?何度俺が地獄うどんを食べたことか・・・」

「はっはっは、いいじゃないか。かわいいもんだよ。」

「かわいいですか・・・。」

「そうだよ。アヤナちゃんは甘えただけなんだよ」「義兄さんコーヒー早くして！さっさと働く！キリキリと！馬車馬のごとく！わたしのために！」……たぶん。」

ぶつぶつと文句言いながらもコーヒーを煎れる俺

もしかして尻に敷かれてる？

義兄としての威厳……皆無

いかん！このままじゃいかん！義兄として威厳を持たねば！！

「ほらっ。次からは自分で煎れるよ。」

ちよつと強く言ってみる。

「ん。ありがと義兄さん。」

満面の笑み

ああ、これにいつも負けるんだよ

でも、負けてもいいかも……

「ふっ。ちよろいな。」

「アヤナちゃん・・・悪女だね・・・。」

「義兄さんはいいんですよ、あれで。」

「歪んだ愛情表現だねえ。」

「万が一に愛があるとしてもそれは兄妹愛ですよ。」

「はいはい。」

12日目 コーヒー煎れて（後書き）

20000も越えました!!!

これからもがんばって書いていきます。

そろそろ冬休みも終わります・・・

楽しかったですが、餅を食べ損ねたことが悔しいです。

13日目 第一回クラス裁判 上

「時に義妹よ。」

「なに？」

「なぜお前は昼休みに俺のクラスにいるのだ？しかも、その二人も。」

そう、昼休みになると、どこからともなく義妹と二人の妹たちが現れた

「ん？なんか最近会ってないとか言うから連れてきた。」

「いや、リカがケイ兄に会いたいと言い出したからさ。」

「えっ！わ、私言っていないよう。お兄ちゃん、本当だよ？」

う、うん……

三人が来たのはいいとしても

周りからの視線が痛い

こんな時はいつものパターンでいけば……

「「ケイターーーーー！！！」」

ほらやっぱり

「まあまあ落ち着け二人とも。」

ハルカとタクヤが現れた

「この二人はだれ！そしてなに！」

「あ、どうも。私1年のアリサって言います。」

「わ、私はリカです・・・1年です・・・」

「まあ、そういうことだから。」

「で、この二人が兄と呼んでいるのはなぜ？また義妹？」

それをどう説明すればいいのか・・・

下手な説明は誤解を招く危険がある

「あ、それは義兄さんが呼んでくれて必死に頼み込んで。はい、それはもう獣のごとく。」

「おい！」

義妹よ、俺をまた陥れるつもりか

「そ、そんなケイタ・・・不潔よ。」

「ああ、俺もまさかお前がそんなやつだとは・・・」

「あゝ違うからね。ね、アリサちゃん？」

「ケイ兄が嫌がる私たちを無理矢理・・・うう・・・」

ちよっと！なに泣きまねまでしてるの！

うわっ二人の視線がさらに冷たく

「ち、違つよねえリカちゃん？」

「・・・（ポッ）・・・」

ちよっと顔赤らめてうつむかないでよ！

うつつ視線が冷たくいたく・・・

「「じい~~~~」」

うつつ誰か味方はいないのか・・・

救援を！救援を頼む！！

「まあまあ義兄さん。そんな義兄さんの性癖はおいといて、はいお弁当。」

「おいとくなよ！誤解を解けよ！」

「まあまあケイ兄。気にしたら負けだよ。」

うつついじめられてるよ

でも親父、俺負けないよ

「あ、そういえば義兄さん。明日お母さん達来るらしいから。」

「なに！やつらが来るのか・・・そういえば、俺義母さんに会ったことないな。」

「そういえばそうだね。」

「ていうか、なんで急に来ることになったんだ？」

「ん？なんか私と義兄さんがうまくやってるのか気になったからだって。」

ああ、神の救いか・・・この義妹の虐待を義母に訴えるチャンスがこつも早く来ようとは・・・

「別にうまくやってるのにねえ・・・ナニからナニまで・・・」

「おい、それは誤解を招く危険がある。」

しかも、ご丁寧にはそつと顔を赤らめて言いやがって

「」「」「じい」「」「」

あれ？なんか視線が二つ増えてるんですけど

リカちゃん、アリサちゃん・・・君たちまで・・・

「ケイ兄．．．．」

「お兄ちゃん．．．」

「「ケイタ」」

いやいや違うからね

そろそろ気づこうよ君たち

「違うって！アヤナの嘘だって！」

「あつ！忘れてた！そういう設定だったね。ごめん義兄さん．．．」

お、お前は本当に．．．．

あ、あれ？みんなの視線が増えに増えて

クラス中が見てるんですけど．．

みんな．．信じてるの？

「や、やだなあみんな。こんなのアヤナの嘘じゃないか。」

「本当ですか？」

「本当だより力ちゃん。」

「アヤナちゃん、嘘だったの？嘘よね？」

「あ、ハルカさん・・・私は嘘つてことだと思います。」

お前はなぜ誤解を招く言い方をするのだ!!

あ、ハルカが怒ってる

ぶるぶるしてる

「委員長として、第一回クラス裁判の開廷を宣言します!!!!」

「「「「「うおおおお!!!!」「「「「「

な、なぜこうなるの？

14日目 第一回クラス裁判 下

「えゝそれでは、ケイタの処罰の決定会議もとい、第一回クラス裁判を開廷します。裁判長は委員長こと私、ハル力がつとめさせていただきます。」

ていうか、処罰は決定なのか・・・

「それでは検事。彼の罪状を述べてください。」

「はい。」

おいおいタクヤよ。お前が検事なのか。

なら原告は誰だ？

「彼、ケイタは、義理とは言え妹であるアヤナちゃんと、ちょ、チヨメチヨメしていたという可能性があります。」

「なるほど、原告の意見はどうですか、それであっていますか？」

「「「死刑じゃゝ！血祭りじゃゝ！！」」」

おいおい、クラスの男子全員が原告かよ。

「ふむ、それでは被告人。なにか言い残したことはありませんか？」

「言い残したことって、死刑決定かよ！！ていうか、よく考えたら原告がクラスのやつらっておかしいだろ。この場合、被害者はアヤ

ナであつて、アヤナが訴えを起こさないなら問題はないんじゃないか？もつとも、もともとなにもないのだが。」

「それは違う！これを見ろ！！」

タクヤが掲げた本は、『学級法 男子編』。なんじゃそりや

「お前は、この法律の第四条『クラスの男子は、誰か異性と関係を持つ場合、クラスの他の男子全員に相手の紹介、面接などを経た上で、70%以上の承認を得なければ関係を持つてはならない。』に反した！」

そんなものがあつたのか・・・

「よつて、我らクラス男子一同は、お前に『1週間ゲイ部に体験入部』の刑を求める。」

「ふむ、妥当な処分ね。」

「いやいや、まず冤罪だから。そこを考え直そうよ。」

「甘い、甘いわね。もはや冤罪かどうかなんてことは問題じゃないのよ。」

いや、問題にしようよ・・・お願いだからね

「そつだ！俺には弁護人がいるはずだ！弁護人を！」

「ここだよ。」

なぜお前が弁護人なのだ義妹よ。

「それでは、弁護人。何か異議はありませんか？」

そうだ、こいつの口の達者さなら

やってしまえ、義妹よ！

「異議無し。」

「無いのかよ！」

こいつ、俺をとことん陥れるつもりだな。

「ていうのは冗談で。」

こいつ、なにを考えてる、油断はできない。

「この法には抜け穴があるんです。」

なに！

それは真か！

やっぱりやるときはやるじゃないか義妹よ。

「それは、これです！」

バンッと出てきたのは

「「「はさみ？」「」「」

そう、はさみである。

なにを考えているんだ？

「男子が異性と関係を持つ場合に適応されるのがこの法なら・・・

」

ごくっ

「義兄さんが男じゃなくなればいいんですよ。」

義妹よ、恐ろしいことをしゃきしゃきとはさみを鳴らしながら言うな

義兄に兄ではなく姉になれと言うのか

「「「異議なし」「」「」

「え？ちよつと待った！それはないだろ！」

「それではこれで第一回クラス裁判を閉廷します。続いて、これより処刑執行の時間となります。」

「「「おおおおおお！！」「」「」

「それでは、処刑部のみなさん入ってきてください。」

ドアを開いて、ぞろぞろと覆面の男達が入ってきた。

「それでは、気合い入れていつてみようか。」

「やめてくれ~~~~~!!!!」

「もう、こんなことでビビるなんて男じゃないぞ。まあ、今から男じゃなくなるんだけどね。」

「悪く思っなよケイタ。」

「おい、お前ら、腕を押さえるな!」

「しよしよしよ処刑~~~~!!!!!!」

シャキンシャキン

「いやああああ!!!!!!!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3190d/>

V S 義妹な日々なのか？

2010年10月9日01時36分発行